

月刊

2017

11
月号

みんぱく

特集

みんぱく

40

周年

みんぱく開館40周年にあたって 吉田憲司
賑やかで、少し悲しくて 池澤夏樹
まったく違っていて、とても似ている 岸政彦
何度でも楽しい 柴崎友香
エル・アナツイ 瀑布スズキコージ
個の力、組織の力そしてマス力の 松田素二
作品世界に命を吹き込む場所 ヤノベケンジ
学問のかきまぜ役 鷺田清一

夢の島は遠く

浜村 淳
はまむら じゅん

プロフィール
1935年京都府生まれ。映画評論家、ラジオパーソナリティ。同志社大学文学部卒業。タレントとしては初めて国立大学和歌山大学経済学部)の講師となった。著書は『浜村淳の浜村映画史』(青土社)、『京都人も知らない京都のいい話』(PHP研究所)など多数。2009年、文化庁長官表彰。MBSラジオ「ありがとう浜村淳です」などで活躍中。

ハワイへたびたび行った。

ゆくたびに、この島の日本人の話を聞いてまわった。なるべく高年齢のかたに伝説、噂話、想い出話を語ってもらった。

それは明治元年(一八六八年)のころにさかのぼる。横浜あたりにヴァン・リードという男があらわれた。ハワイ領事というウソくさい肩書きを振り回して人々を誘った。

「ハワイへ来ませんか。いい金儲けができます。蛇二匹つかまれば一ドルになります」。おもに生活に困った農民、町民、浪人の間を説いてまわった。集まった人々を船に乗せ、夜の闇にまぎれて密航させた。

火山島に蛇はいない。ほんとうの仕事は、このころさかんになりはじめた砂糖キビ畑での労働だった。苺取り、束ねる、はこぶ。炎天下における想像を絶する苛酷な労働だった。

白人の現場監督は馬に乗り、鞭をふるって労働者を追い立てた。夜は体を休める小屋もなく、だれもが土の上に寝ころがった。奴隷以下の悲惨な暮らしだった。そのうち、うめくように暗い歌が湧き出して来た。

「行こかメリケン もどろかジャパン ここが思案のハワイ島 ホレホレ

このころ世界に植民地政策が広まっていた。アメリカはハワイに目をつけた。

宗教と病気で島の人々の思想を変え人口を減らした。王制を廃し抵抗勢力には海兵隊の武力で制圧した。

このときダイヤモンド岬に幽閉された最後の女王リリウオカラニを助けて奮戦したのが明治元年にハワイに移住した人々の息子たちだった。みな戦死した。亡くなった若者たちを偲んで丘に立ち、女王が青い海に向かって歌ったのが名曲「アロハ・オエ」だと云われている。

これにさきだつて明治二四年、ハワイのカラカウア大王がはじめて日本を訪問している。

大王は秘かに明治天皇に面会を求め、アメリカの侵略から島を守るため日本のチカラを借りたい、そのために御一族の山階宮定麿王と姪のカイウラニ女王との縁組をお願いしたいと訴えた。しかし天皇は一族を雲煙のかなたのような想像もつかない遠くの島へやることはできないと拒否された。そのかわり正式な移民は認めようと仰せられたという。

このときをもつて日本人のハワイ移住がさかんになつたが、その六〇年のちに太平洋戦争勃発という新たな悲劇がハワイの日本人におそいかかつて来る。

夢の島は夢ばかりではなかつた。そのかぎに民族の歴史の裏がある。裏の真実はわかりにくい。

どの民族にも興亡の歴史がある。風俗習慣の変遷もある。そのことを民博はわかりやすく興味深く教えてくれる。

一九五九年、ハワイはアメリカの五〇番目の州になった。まぎれもなく、これは真実である。

月刊 みんぱく

11月号日次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
夢の島は遠く
浜村 淳</p> <p>特集 みんぱく 40周年</p> <p>2 みんぱく開館 40周年にあたって / 吉田 憲司</p> <p>3 賑やかで、少し悲しくて / 池澤 夏樹</p> <p>4 まったく違って、とても似ている / 岸 政彦</p> <p>5 何度でも楽しい / 柴崎 友香</p> <p>6 エル・アナツイ瀑布 / スズキコージ</p> <p>7 個の力、組織の力そしてマスの力 / 松田 素二</p> <p>8 作品世界に命を吹き込む場所 / ヤノベ ケンジ</p> <p>9 学問のかきませ役 / 鷲田 清一</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
バグパイプを奏でる
印東 道子</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
ハイブリッドな悪魔
黒川 正剛</p> <p>16 新世紀ミュージアム
浜松市楽器博物館
福岡 正太</p> <p>18 手芸考
手芸で社会とつながる
——大阪万博の「童心曼陀羅」
山崎 明子</p> <p>20 新版『国立民族学博物館 展示案内』
刊行のご案内</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

みんなぱく

40

周年

二〇一七年十一月、みんなぱくは開館四〇周年を迎えました。当館館長の挨拶とともに、各界で活躍され、当館にゆかりのある方からいただいたメッセージをご紹介します。

みんなぱく開館40周年にあたって



国立民族学博物館長
よしだ けんじ
吉田 憲司

国立民族学博物館（みんなぱく）は、このたび、開館四〇周年を迎えることができました。これもひとえに、先輩諸氏のご尽力、そして関係者の皆さまのご支援の賜物と、心より御礼申しあげます。

ご承知の通り、みんなぱくは、博物館機能と大学院教育の機能を備えた、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として、世界で唯一の存在です。みんなぱくには現在、世界各地から集めた三〇四万五〇〇〇点の民族学標本資料が収蔵されていますが、このコレクションは、二〇世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大のものとなっています。開館時には四棟だけであった展示棟も、その後三棟が増設され、また特別展示館も加わって、みんなぱくは世界最大の民族学博物館となりました。また、世界全体をカバーするコレクション、展示、研究の陣容をもつ機関としては、アジアで唯一の存在です。このことに伴って、みんなぱくは、アジアで唯一、したがって日本の国内では唯一、世界全体、地球全体をカバーする研究の組織と研究者の陣容をもつ機関だということになります。

すでにみんなぱくは、梅棹初代館長の目指した「世界第一級の博物館」としての実を備えるようになったと、いつてよいようです。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えています。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯が至る所で起こるようになっていきます。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築を目指す文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。次代に向けてみんなぱくに課せられた責務は、きわめて大きいと考えています。



アフリカ展示場にならぶチエワのかぶりもの型の仮面「ニュー・ヨレンバ」。自ら製作したもの（2016年撮影）

賑やかで、少し悲しくて

ぼくは海外旅行をマイクロネシアから始めた。行った先で「椰子の使いみち三十種類」とか「カロリン諸島の物質文化」などという本を手に入れて驚喜した。フィジーでもインドでもハワイでも同じように本を漁った。人の暮らしの基本に返りたいというのが動機だった。

だから、国立民族学博物館というところがあって、具体物が展示されていると知った時は嬉しかった。それ以来どれほど通っただろう。関西圏に住む親友を強引に連れていったことも

いげざわ なつき
池澤 夏樹
作家



©Kazuhiko Washio

ある。詩を書く男だったからぼくの意図をすぐ理解して、目の前に置かれた品々を一つまた一つと見てゆく。それをぼくは後ろから見ていた。ぼくよりずっと歳下だった彼はもういない。そういう風にして、ぼくの人生はこの博物館の四十年に重ねられる。

民博の展示は多彩で、賑やかで、それでいて少し悲しい。道具は人の手で作られて先、使われて、そうするうちに色と形が少しずつ変わる。いわば経年変化だ。だが、蒐集されて博物館に収められるとそこで民具たちの変化は止まる。手から伝わっていた体温が抜けて室温になってしまう。さまざまな音をたてていたはずなのに静まりかえる。

そう思う一方で、モノが変わらないことに対する安心感もある。考古学で言えば地層は絶対である。同じように文化人類学においては、地域Aで時期Bに採集された民具Cの、その材質と形と色合いはそのまま絶対不変だ。アフリカで貴金属の細工師たちが用いた分銅は一つ一つが意匠を凝らされており、日常使用の先にして芸術の少し手前という絶妙な位置にあって、見る者の心を動かす。民博に行けば見られる。

ぼくは自分ではコレクション趣味がまったくない。身辺に集まるモノはひたすら散らすようにしている。それぞれに解放してやる。そうしないと自分の移動の自由が確保できない。

モノを手放したくないという欲望はすべて博物館／美術館に託す。民博がその筆頭。

みんなぱくわたしのおすすめ

チェチェメニ号 (H0004975)

民博でいちばん心惹かれるモノを選べば、あのオーシャン・カヌー「チェチェメニ号」になる。沖縄海洋博の時にマイクロネシア連邦ヤップ州のサタウル島から伝統航法でやってきた舟。その後にはポリネシア全域の古代の航海を再現したホクレア号などの偉業が続く。



朝日を浴びてヒロの港をゆっくり曳航（えいこう）されるハワイイロア



まったく違って、
とても似ている

岸 政彦
社会学者



1967年生まれ、大阪府在住。立命館大学教授。研究テーマは沖縄と生活史。主な著書に『同化と他者化—戦後沖縄の本土就職者たち』(ナカニシヤ出版)、『街の人生』(勤草書房)、『断片的なもの社会学』(朝日出版社、紀伊國屋じんぶん大賞2016受賞)、『質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学』(有斐閣、共著)、『ピニール傘』(新潮社、第156回芥川賞候補)など。

みんなくわたしのおすすめ

ギター展示 (H0196397他)

自分でもギターやベースを弾くので、世界中から集められた弦楽器の多様性と共通性に惹きつけられる。それにしても楽器というものはどうしてこんなに美しいのだろう。



最初に民博に行ったのは、あれはいつだろうか。もう三〇年も前のことだ。関西大学に通う大学一回生だった私は、ある冬の日、一限の必修の英語の授業に向かう阪急千里線があまりにも満員だったために、すっかり嫌気がさしてしまい、なぜか関大前駅で降りるのをやめてしまった。そして、たまたま目についた、山田という駅で、目的もなく、はじめて降りてみた。改札を出ると、案内板の地図に、万博公園が書いてあり、そのなかに「国立民族学博物館」という表示があった。こんなところにこんなものが。予定外の行動だったが、私は躊躇なく、冬の寒い朝、だれもいない道をひたすらひとり歩き、万博公園の西口から入って、民博へ向かった。それは偶然の出会いだったのだ。



楽器の展示が好きでよく見るのだが、見慣れたフェンダーとギブソンがそのまま飾ってあるのは、おもわず笑ってしまった。この展示は、民族/民俗文化とは何か、という問いそのものである(2017年撮影)

私が民博から学んだことは、二つある。まずはじめに、人びとはそれぞれ違う、ということ。はじめての偶然の出会いですっかり民博に魅了された私は、何度も何度も通って、大きな地域ごとに分かれ、ほぼ世界を一周するその展示を、飽きもせず眺め続けた。そして、それらの複雑で膨大な多様性に打ちのめされた。世界はなんと、いろいろの、別々の、異なった人びとが存在することだろう。そしてもうひとつは、人びとはそれぞれ似ている、ということである。特に楽器の展示のところでは、私自身がベースを弾くこともあり、弦楽器がシルクロードを通してどのように変化していったかに驚いた。しかし、もっと驚いたことに、それらはすべて似通っていて、私たちが普段使っているベースやギターと、それほど違わないのだ。

それぞれかけ離れた、多様なものたちが、同時にとても似通っている。私は民博の展示物から、人間の道具や衣服の多様性と共通性を学んだが、それは要するに、人間のものがそういう存在である、ということなのだ。私をはじめ民博に出会ったときから、三〇年という時間が流れてしまった。そしていま、気がつけば、私自身が、人びとの多様性と共通性を調べて書く、という仕事をしている。私は民博で人間を教えるもらったのだが、さらに、私は民博によって、一生を費やすのに値する仕事まで与えてもらったのである。

何度でも楽しい

柴崎 友香
作家



1973年大阪府生まれ。2000年『きょうのできごと』(河出書房新社)を刊行(同作は2003年に映画化)。2007年『その街の今は』(新潮社)で芸術選奨文部科学大臣新人賞、細田作之助賞大賞、2010年『寝ても覚めても』(河出書房新社)で野間文芸新人賞、2014年『春の庭』(文藝春秋)で芥川賞受賞。著書『わたしがいないかった街で』(新潮社)、『パノラマ』(講談社)、『よう知らんけど日記』(京阪神コマガジン)、『千の扉』(中央公論新社)他多数。

みんなくわたしのおすすめ

モンゴルの天幕 (H0202021他)

みんなくに展示されている部屋や家は住んでみたいものばかりですが、モンゴルの天幕は小長谷有紀先生と対談させていただいたときに中に入ることができました。天井が高く、外から見るより広くてとても居心地がよかったです。みんなくに泊まるのは子供のころからの夢です。



※写真は現在展示中の資料とは異なります

今年の春、フィリピンのマニラを訪れた。文学イベントが行われる大学に到着し、信号待ちをしていたら、派手に飾り付けられた車が現れた。あっ、みんなくわにあるやつや！といさうになった。ジープニーと呼ばれる、乗り合いバスだった。三日後、車で五時間の距離の港で、南の島へ渡る船が現れたときも、あっ、みんなくわにあるやつ、と思った。細長いボートの両側にそりのような長い部分がついた、遠浅の海でパラソルを取るための形。竹と材木を組み合わせた、簡素な、理にかなった作り。みんなくわに展示されているものは、現在の生活と深く結びついていることを、体感した。小学生のころから何度も訪れたみんなくわは、常にわたしの憧れの場所だった。黒い壁を背景に沈黙している当時ジプシーとよばれていた人びとの人形やアフリカの仮面などはちよつと怖くもあったが、見たことも行ったこともない世界の広さと複雑さを教えてくれた。未来の船みたいなブースで見るとビデオテークも楽しんでいた。いつそう興味を深く持ったのは、高校生以降。九一年の「大インド展」は、巨大な山車や楽団による演奏会もあって、ダイナミックなエネルギーに圧倒された。このころから、昔の珍しいものが置いてあるというイメージの博物館とは違って、ここには今の生活があるのだと実感するようになった。アポリジニ系アーティストの作品(デザインゴの家族の彫刻)があまり



アポリジニ作家によるディンゴの彫刻。リアルでありながらアートとしてイメージが広がる不思議な魅力があり、しかもとにかくかわいいのでみんなくわに行くたびに長時間見せていました(2003年頃撮影)

展示され、圧巻だった。文化が影響し合い、取り入れ、抵抗し、そこからまた新しい文化が生み出されていく、それを感じているだけで、今の世界で生きていくことを勇気づけられる。みんなくわにいると、人間が工夫を重ねて生きてきた、厳しい暮らしの中でも身の回りを豊かに感じようとしてきた営みに、わたしたちが支えられていることがわかる。

エル・アナツイ瀑布

ばくふ
スズキコージ
イラストレーター



1948年静岡県生まれ。物心がついたころから絵を描き始めて現在に至る。1968年新宿歌舞伎町の路上にて初個展、1971年個展「コージスキンの世界」開催。1973年最初の絵本『ゆきむすめ』(世界文化社)を出版。絵本、ポスター、壁画、舞台美術など幅広く活動する。『エンソくんきしゃにのる』(福音館書店、1989年)で小学館絵画賞、『ブラックエンダー』(イースト・プレス、2008年)で日本絵本賞大賞などを受賞。当誌2017年10月号にて表紙絵を担当。

十数年前、初めて民博城を訪れ、アフリカの部屋に迷い込むと、カラフルな材木で組んだ、お酒も飲めると言うカフェテラスがあり、手前のテーブル椅子に腰かけ、アラクク無しで『やし酒飲み』のナイジェリア生まれの作家エイモス・チュツオラを想い出し、『文無し男と絶叫女と罵り男の物語』、『妖怪の森の狩人』(PREVILLE刊、絶版)に、イラストレーションを楽しく描いたのを思い出した。店の前には、写真スタジオ?があり、壁から吊した巨大キャンバスに、居間の内部(ソファアとか、じゅうたん、テレビジョン)

が描いてあって、靴を脱いで、キャンバスの中で写真撮影OK!の表示があり、江戸の長屋に住む八つあんが、せまい部屋の壁につたない画で、立派な家財道具をビッシリ描いてごきげんに住んでいたのを思い出した。そして数年後、エル・アナツイを民博城で見た。十数メートルもある、サラサラと鳴る超人マントが揺れている。近づいてジッと仰ぎ見ると、これは、ジュースや酒ビンに付いているアルミ蓋チップが、数十万個数珠つなぎに銅線で編み込んであるではないか。

まわりかなたを見廻すと、繊細かつ大胆な色を放つナイアガラ瀑布が絨毯のごとく、崇高にそびえ落ちている。

そして、ふらふらと民博城内の大階段に行くと、超巨大藁のような物体があり、宇宙人の家かなと思いきや、ゴミ箱と表示してあり、いつも民博城に行くと、眼球が破裂し、全身全霊フラフラになるので、是非緑の木立の中に古代ハンモックを吊るし、おいしいアラククを飲めるようにしたい。



©スズキコージ

家馬車 (H0003431) [※現在は展示場にごさいません]

十数年前民博城のヨーロッパの部屋に停めてあった(馬はいなかったが) マヌーシュの家馬車。画は、ルーマニアのトランシルバニア、シゲット行特急列車の窓から瞬かいま見た光景。



©スズキコージ

個の力、組織の力 そしてマスの力

まつだ もとじ
松田素二
人類学者



1955年広島県生まれ。ナイロビ大学大学院修了。現在、京都大学大学院教員、文化人類学会会長。アフリカをフィールドとした文化人類学が専門。主な受賞歴は、第14回NIRA政策研究・東畑記念賞、第22回大同生命地域研究奨励賞、第7回日本文化人類学会賞等。主な著書は、『都市を飼う慣らす』(河出書房新社)、『呪医の末裔』(講談社)、『日常人類学宣言!』(世界思想社)等。

研究機関に限らず、ある組織がより大きな力を発揮するには、組織に所属する一人ひとりの創造力や実行力が何より重要だ。もちろん個の力がバラバラにならないようにそれを一つの目的に向かって効率的に方向づける組織の力も同じように重要だろう。しかし直面する難題を克服し新しい世界を築くために、もう一つの決定的な力がある。それは「マスの力」である。同様の、あるいは隣接した世界で何かを生み出そうとする「同志」がそれなりの規模で存在するとき、それらが発する力は、個人の力の

にはこのマスの力がある。日本中探しても、民族学・文化人類学やその関連分野を専門とする研究者が、民博ほど集積している組織・機関はない。国際的に見ても卓越したマスの力を備えているとっていいだろう。

総和とも、組織としての統制された力とも異なる独特の強靱な発信力をもつものだ。もちろんこのマスの力は、どの組織でも持っているというものではない。多くの組織は、さまざまな異種の世界を持ち場とする人々が協働して成り立っているからだ。しかし民博

では今日、このマスの力が挑戦する難題とは何だろうか。民博が誕生した一九七〇年代は、「人類学的知」に多くの非人類学者や一般の人々が惹きつけられた時代だった。それまで常識とされてきたものの見方や考え方を、異文化のレンズを通して相対化していく破壊力は、人類学の真骨頂だった。誕生したばかりの民博は、マスの力を存分に発揮して、この思想運動のセンターとなった。しかし一九八〇年代から九〇年代にかけて、人類学的知自身のもつ無意識の「高飛車で傲慢」な視点が批判されていった。二一世紀にはいると、民族学・人類学は、より現地のひとやもの、思想や環境と直接的なかわりを持つことが要請されるようになった。そうすると人類学者たちは、その要請を無視あるいは拒否したり、逆に無条件にその代弁者や保護者になったりして自分自身の立ち位置を喪失しつつある。今こそ、民博は再びマスの力を発揮して、民族学的・人類学的知の可能性を探り、新しい時代のその知の在り方を指し示す野心的な事業のセンタープレーヤーになってほしい。これが、七〇年代に大学院生としてその力を間近に実感し、現在、文化人類学会の会長としてこの難題と向き合っている私の個人的な希望なのである。

みんぱくわたしのおすすめ

アフリカの仮面 (H0167125他)

アフリカの仮面は、造形的にも社会的にも面白いのだが、独特の「人間像」を象徴している点で、思想的にも哲学的にも興味深い。人間と精霊、動物の間を時空間を超えて自在に往来する主体は、自律した理性的個人を至上とする人間観とは真逆なものだ。



1979年から調査をつづけている西ケニアの山村の畑。最初に調査で訪れたとき現地語を教わった友人(当時小学生だった)の長男と筆者(2015年撮影)

作品世界に命を吹き込む場所

ヤノベケンジ
現代美術家



1965年大阪府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。90年初頭より「サヴァイヴァル」をテーマに大型機械彫刻を制作。97年にチェルノブイリを訪問するプロジェクトを行う。03年国立国際美術館で個展を開催。11年には震災復興を掲げるモニュメント「サン・チャイルド」を制作。南茨木駅前設置される。デザイン、舞台、映画等領域横断的な創作活動も続けながら、京都造形芸術大学で教授も務める。

私は、大阪万博会場跡地、今の万博記念公園の近くの茨木市で育ちました。その前は、八尾市に住んでいたのですが、万博が終わってから引越してきたのです。ですから万博に行った記憶はほとんどないのですが、万博会場のパビリオンが解体され、未来都市が一瞬にして消えていく過程は覚えています。それが私たちの遊び場になっていました。「太陽の塔」だけではなく、大屋根やお祭り広場の演出を担当した



国立国際美術館解体時に立ち入った際の写真（撮影：豊永政史 2004年）

ロボットも残っており、未来世界のその後に迷い込んだような気がしました。そのことを「未来の廃墟」と呼んでいます。ただ、ほとんど更地になった万博跡地は逆に何でも作れるようなワクワクした場所でもありません。その後、万博跡地は公園へと変わっていき

ます。人々が去った後に、自然が戻って来たことはとても象徴的だと思いました。その後、広大な森の中に、万博のパビリオンを引き継いだような未来的な民族学博物館の施設が造られました。もしかして、未来というのは人工的な空間ばかりが広がるのではなく、サンダーバードのような感じで、鬱蒼とした森の中に、あまり外観の奇抜さを主張しない民族学博物館のような建築があるというのが主流になるのかなと思いました。民族学博物館の中央には大きなパティオがあり、古代の遺跡のような階段状の空間に越前焼の大壺と深鉢が置かれており、惹きつけられます。その名も「未来の遺跡」というそうです。展示を巡ると、世界中から集められた人々の生活用品が見られて、人はいないけれどその痕跡から生々しい生活に浸れるのが印象的でした。ただ、子供心にもっと惹かれたのはパイプ状のコックピットのようなビデオテークで、入場チケットを入れると、世界中の民族の生活をビデオで見られました。創造の背景になる営みを知ること、展示物が生き生きと感じられる効果があり、現在、私が作品と同時に制作過程などの映像を作ることに通じています。万博後の民博は「太陽の塔」と対となって、自分の作品世界に命を吹き込むための重要なファクターになったように思います。

みんなくわしのおすすめ

干し首 (H0029981)

アメリカ展示場で見たとこの資料は小学校の遠足で見ると他の展示物の印象が全て吹っ飛ぶほどの衝撃で、学校中で話題になりました。多民族の存在と多様な倫理観、価値観があることを知り、世界は広いと感じました。

先住民シュアルの人びとの尊厳を守るため、現在は公開の対象から外しております

学問のかきまぜ役

わたしたきよかず
鷲田清一
哲学者



1949年京都府生まれ。京都大学文学部卒業。関西大学文学部教授、大阪大学教授、大阪大学総長を経て、現在は京都市立芸術大学理事長・学長、せんだいメディアテーク館長。1990年代より「臨床哲学」のプロジェクトに取り組む。主な著書に、『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫、サントリー学芸賞）、『聴くことのか』（ちくま学芸文庫、桑原武夫学芸賞）、『くずくずの理由』（角川選書、読売文学賞）など。元日本倫理学会会長。

民博には、とくに一九九〇年代、足繁く通いました。人類学、霊長類学、法制史、民俗学、統計学、社会学、文学、哲学など、異分野の研究者たちの集う研究会にです。調査研究のフィールドもばらばらだし、研究会といってもたがい頭突きをしあうような荒々しさがあって、いつも異種格闘技のリングに上がるような気分でありました。そして毎回、日が暮れると阪急茨木市駅あたりの居酒屋に席を移して、エンドレスの議論を続けるのでした。

突拍子もない企画展示、というかパフォーマンスにも参加し、大道芸人展とでもいべき「みんなくミュージアム劇場——からだは表現する」（二〇〇〇年）では、美術家の森村



「キー坊とヤッさんの哲学漫才」（右が森村泰昌さん、左が筆者）

泰昌さんと「キー坊とヤッさんの哲学漫才」というのを来館者の前でやらせていただきました。客席の椅子もまっ赤なペンキ缶にラバーを貼った手作りのものでした。展覧会では、会場を真っ黒の布幕で仕切っ



「赤道アフリカの仮面」展の展示風景
撮影：千里文化財団

た「赤道アフリカの仮面——秘められた森の精霊たち」展（一九九〇年）が、まるで芝居小屋にいるようで、強く記憶に残っています。これらは、民博が美術館でもたんなる博物館でもなく、資料庫でありアーカイヴであるからこそできたことだと思えます。ここでは、同時代のアカデミックな思考が、「知」や「美」の枠を外して、野生の思考、神話的な思考、ヴァナキュラーな思考と渾然一体となっていました。当時、民博という機関は、研究においても展示においても、学問のかきまぜ役をしかと果たしていたように思います。現在、大学で研究外の業務が急増しているなかで、いまいちど自分が取り組んできた研究を激しくシャッフルするオアシスのような場所になることを願っています。

みんなくわしのおすすめ

特別展「きのうよりワクワクしてきた。——プリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち」（2005年）

棄てられた飲料アルミ缶や鍋、洗濯ばさみやビニール袋、それにものすごい枚数の食べ残しの写真など、がらくたを所狭しと並べ、組み立てた展示に頭がくらくなりました。



〇〇してみました世界のフィールド

バグパイプを奏でる

いんとう みちこ
印東 道子
民博 人類文明誌研究部



調査・研究に没頭していた大学院生時代、バグパイプにあこがれたわたしは思い切って地元のパイプバンドに入門を願い出た。さまざまな場所で演奏する機会をえて充実した日々を送ったニュージーランドでの留學生活の思い出を振り返る。



バグパイプ奏者に先導されるオタゴ大学の卒業生（筆者所有、1983年）

★
ニュージーランド、
ダニーデン

ニュージーランド南島にあるダニーデンは、スコットランドからの移民によって開拓された都市。その中心にあるオタゴ大学大学院で七年ほど研究生生活を送った。今から三〇年以上前のことだ。留學一年後の修士号授与式で出会ったのがバグパイプだった。ガウンをまとった卒業生の二団はバグパイプ奏者に先導され、メインストリートに公会堂まで行進する。先頭付近を歩いてきたわたしは、そのスコットランド的なサウンドに魅了され、いつの日か自分で演奏したいと感じた。

ところが、発掘調査や博士論文執筆などで五年が忙しく過ぎてしまい、帰国が迫ってきた。チャンスは待っていないと悟り、市内で評価の高いダニーデン・ハイランド・パイプバンドを訪ねた。「二年後には帰国するけれどバグパイプを習いたい」と頼んでみた。どこから見てもスコットランド系には見えない女性のわがままな願いに、「通常はバグパイプを演奏できるまでに一年半はかかる」という返事。それでもよいからと、ともかく毎週一回、バンドメンバーにレッスンしてもらったことになった。

猛練習の日々

まずは、練習用チャンター（リードをもつ縦笛）で指使いを習うが、Gからはじまる九音しかない。これら以外に半音を出すこともできない。すぐに楽譜を見て指が自然に動くようになったので楽勝かと思いきや、音符と音符のあいだになんやら細かい装飾音符（グレースノート）が付いている。これがくせもので、メロディの合間にすばやく指を動かして細かい音をはさむのは難しい。

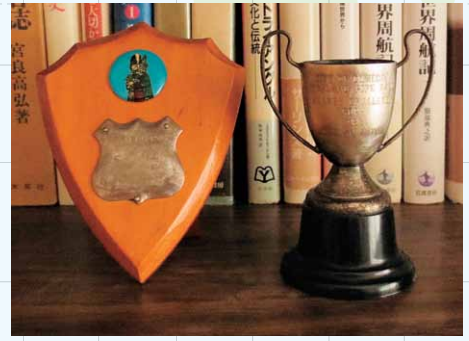
一緒に習っていたのは一〇歳ぐらいの男の子。楽譜を見るのも初めての彼にはすぐに追いついた。マーチの他、ジグやリールといったスコットランドのフォークダンス曲を、練習用とはいえチャンターで演奏するのが楽しく、人類学科の実験室や標本室などで毎日練習して曲を見ていった。

三カ月が経ったところで、ジュニアバンドの練習に参加することを許され、コンテスト用の曲も一緒に練習するようになった。しかしまだ実際のバグパイプでの演奏は許されず、練習用チャンターでの練習が続いた。四カ月目にバンド所有のバグパイプを貸与され、初めてそれを演奏したときに、なぜ暗譜するまで演奏を許されないのかが理解できた。

バグパイプの原理は、息をバッグ（革袋）のなかに吹き込んで溜め、肘でバッグを少しづつ脇に押し付けることで、空気を三本のドローンパイプとメロディを演奏するチャンターへ送り込む。これによって息継ぎするあいだも音は途切れることがない。しかし大量の息を吹き込みつつ一定量の空気をバッグから押し出し、なおかつメロディ演奏を同時にするのは慣れでも大変なことで、暗譜しておかなくてはとても演奏などできない。

デビューを果たす

猛練習をした結果、正式にジュニアバンドのメンバーになり（上達するとシニアバンドにあがる）、地方大会や全国大会にも参加した。バンドのユニフォームはもちろんキルトで、メンバーに貸し出される。バグパイプの



上：市祭パレードで演奏する筆者（D.Anson 撮影、1988年）
下：所属バンド年間優秀賞トロフィーと個人コンテスト優勝の盾

音色は決して美しいとはいえず、チャルメラのようであるが、ドローンパイプから出る通奏低音と調和させて演奏すると厚みのある音になるのが不思議だ。

ダニーデン最古のこのパイプバンドが設立されたのは一八九八年にさかのぼる。現在でも市のさまざまな催しでバグパイプが演奏され、スコットランド色が濃い。市祭でのパレードはもちろん、老人ホームでの慰問演奏、恵まれない子どもたちを招待した演奏会、市の中心広場や植物園での週末演奏など、それまで過した大学での生活とはまったく異なる経験をすることができた。バグパイプは全国的に盛んで、個人のコンテストも各地で開催され、全国統一基準で審査される。ある大会でわたしも優勝し、所属バンドからも年間優秀賞をいただいた。

結局、一八カ月が過ぎたところで帰国することになったが、その直前におこなわれた市祭のパレードでは、パイプメジャー（パイプ奏者のリーダー）の定位置である先頭で演奏させてくれ、わたしのバグパイプ漬けの日々は終わった。

開館40周年記念 カナダ建国150周年記念
企画展

「カナダ先住民の文化の力
過去、現在、未来」

カナダは2017年に建国150周年を迎えました。同国と先住民との関係の変化に着目しながら、多様な先住民文化の歴史と現状、未来を紹介します。

会期 12月5日(火)まで
会場 本館企画展示場

■関連イベント
ギャラリートーク

日時 企画展開催期間中の月曜・木曜14時～
会場 本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券
※都合により時間帯が変更になる場合があります。



北西海岸先住民トリングットの儀礼用かぶりもの

開館40周年記念企画展
アイヌ工芸品展
「現れよ。森羅の生命」
木彫家 藤戸竹喜の世界



「鹿を襲う熊と狼」藤戸竹喜 作

熊をはじめとする北の動物たちからアイヌ文化伝承者の等身大の彫像まで、藤戸竹喜(1934)の主な作品をお話し、創作活動の軌跡とその背景をたどります。

会期 2018年1月11日(木)～3月13日(火)
会場 本館企画展示場

開館40周年記念新着資料展示
「標交紀のコーヒーの世界」

伝説の自家焙煎咖啡店「もか」の店主、標交紀が集めたコーヒー関連資料をもとに、中東から日本へ伝わり、独自に磨かれたコーヒーの世界を紹介いたします。

会期 11月14日(火)まで
会場 本館ナビひろば

開館40周年記念写真展
「世界のフィールドからみんなくへ」
本館の収蔵品、展示品の母体をつくりあげたフィールドワークや収集作業の様子を、当時の写真から紹介します。

会期 11月9日(木)～12月26日(火)
会場 本館各展示場

年末年始展示イベント「いぬ」

2018年の干支である「いぬ」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「いぬ」を紹介します。

会期 12月14日(木)～2018年1月30日(火)
会場 本館ナビひろば

みんなく映画会
第38回ワールドシネマ
「火の山のマリヤ」

グアテマラの高地に暮らす17歳のマヤ人のマリヤの運命をお話し、現代社会における先住民マヤの問題を考えます。

日時 11月5日(日)13時30分～16時(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前に配布

公開講演会
「料理と人間」

食から成熟社会を問いなおす」
生態資源の利用、共食や分配等の社会的機能、味や食感を伝える調理の技術等、食に関わるさまざまな要素から、文明と文化の境界面としての料理を考えます。

日時 11月17日(金)18時30分～20時40分
(開場17時30分)
講師 野林厚志(本館 教授)
中嶋康博(東京大学大学院教授)
宇田川妙子(本館 准教授)

総合同会 福岡正太(本館 准教授)
会場 日経ホール(東京、定員600名)
主催 国立民族学博物館、日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力課研究協力係
06・6878・8209

カムイノミ(神への祈り)

本館に所蔵されているアイヌの標本資料への感謝と安全を願い、北海道アイヌ協会の協力をえて、カムイノミをおこないます。

日時 11月30日(木)10時30分～11時50分
会場 本館玄関前広場(雨天の場合、古式舞踊はエントランスホールにて実施)
※見学可能、申込不要

アイヌ工芸 in みんなく

アイヌ民族が培ってきたもの作りの技術や知恵、伝統から創造された数々の作品にふれてみませんか。北海道アイヌ協会優秀工芸師による「刺しゅう」や「木彫」の実演が行われます。

日時 11月30日(木)～12月3日(日)
11時～16時
会場 本館エントランスホール
◆もの作りワークショップ
アイヌ文様を「糸巻き」に彫つたり、「布コスター」に刺したりしてみましよう。

時間 11時～16時(15時受付終了)
※各日定員10名、先着順、材料費500円

連続講座

「みんなく×ナレッジキャピタル
「フィールドワークを語る」」

この秋開館40周年を迎えるみんなくは展示を生み出すこととなった、数多くのフィールドワークについてお話しします。資料や研究者の来し方についてお話しをさせ、これからのみんなくは興味をもつていただく機会になればと思います(全6回)。

会場 グランフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名

主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
日時 11月27日(月)
19時～20時30分(18時30分開場)
講師 飯田卓(本館 准教授)
お申し込み・お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

みんなくセミナー

日時 11月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第474回

仮面の世界をさぐる
アフリカ、そしてミュージアム

講師 吉田憲司(本館館長)
私の、1975年に始まる、仮面をめぐる、日本でアフリカで、そしてミュージアムでのフィールドワークの軌跡をつづり、仮面という装置の文化の違いを超えた成り立ちについての理解を得るまでのプロセスをたどります。



ニャウの踊り手。死者の霊の化身とされる

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話をしよう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

11月5日(日)14時30分～15時 中央・北アジア展示場
カザフの天幕——住居から祝祭の空間へ
話者 藤本透子(本館 准教授)

11月12日(日)14時30分～15時15分 本館第5セミナー室
娯楽の場としてのコーヒーハウス
——イランのカフエ・ハーネ

話者 山中由里子(本館 准教授)
11月26日(日)14時30分～15時30分 本館ナビひろば
博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産
話者 飯田卓(本館 准教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
ただし、12日(日)は展示観覧券不要

北大阪ミュージアムメッセ

北大阪8市3町の美術館、博物館が2日間みんなくに大集結し、さまざまなワークショップや、地域の民俗芸能上演などを実施します。

日時 11月18日(土)、19日(日)
会場 本館エントランスホール及び特別展示館休憩所(地階)
主催 北大阪ミュージアム・ネットワーク
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日です)

カレッジシアター

「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人ひとの多様な営みを紹介します。
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

誰かのために涙をためる
涙壺をめぐる文化考

日時 11月8日(水)11時～12時30分
講師 山中由里子(本館 准教授)
中東の宗教的マイノリティ
日時 11月22日(水)13時～14時30分
講師 菅瀬晶子(本館 准教授)
お申し込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9007

●無料観覧日のお知らせ
11月18日(土)、19日(日)は、本館展示と企画展を無料で観覧いただけます。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

友の会講演会

【第90回民族学研修の旅開演】

「巨石の島に生きる」
インドネシア・ニアス島の家屋と集落
講師 佐藤浩司(本館 准教授)

【東京】 第120回 東京講演会
11月23日(木) 祝 13時30分～14時40分
会場 モンペル御徒町店4Fサロン(申込先着順・定員60名)

【大阪】 第472回 友の会講演会
12月2日(土) 13時30分～14時40分
会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)

一万を超える島嶼に(100以上の民族が暮らすインドネシア。ここでは、島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋が生み出されてきました。なかでも独特の巨石文化と、船さながらに家屋が並ぶ壮大な集落景観が知られているニアス島では、今も人が溢れ、あたりまえのように日常生活が営まれています。ニアス島だけが何故、伝統的集落を維持し続けることができるのでしょうか。ニアス島を中心に、インドネシアの伝統家屋、そして建築文化財が直面する課題について考えます。

【大阪】 第473回 友の会講演会
2018年1月6日(土)13時30分～14時40分
みんなく名譽教授シリーズ
日本文明の夜明け——梅棹忠夫と三内丸山遺跡
講師 小山修三(本館 名譽教授)

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)

【東京】 第121回 東京講演会
2018年1月27日(土)13時30分～14時40分
北東アジア地域研究拠点関連
カザフの食と儀礼——ひとの一生を彩る草原の恵み
講師 藤本透子(本館 准教授)

会場 モンペル御徒町店4Fサロン(申込先着順・定員60名)
講いずれの講演会も、会員無料(会員登録提示、一般500円。講演会終了後、講師を囲んで懇談会40分をおこないます。

第90回民族学研修の旅
インドネシア、ニアス島と
スマトラ島北部の住まいを訪ねる

2018年3月10日(土)～18日(日)9日間



カステルサルドの親方作「大天使・聖ミカエル」
(15世紀末)(出典: Robert Muchembled,
Diablot, Seuil: Paris 2002)

◆◆◆ 悪魔の形状 ◆◆◆
キリスト教では、悪魔は神に敵対し、人間を誘惑して罪に陥れる存在である。ただし、悪魔が悪行をなすのは神の許可のもとであり、悪魔が神と同等の力をもつのではない。悪魔の力が神の力を凌駕することはない。このことを示す一枚の絵を見てみよう。イタリヤのサルデーニャ島で活躍し、その北岸のカステルサルド大聖堂の絵の作者と推定

キリスト教世界の悪魔はハイブリッドな存在だ。動物と人間の要素がデフォルメされ、たうえて癒着し、確固としたひとつの存在として表象されるからだ。ひとつの存在と述べたが、本来、悪魔は霊的な存在である。しかしそれがひとたび画像や像として創作されると悪魔はハイブリッドな物質的実在として立ちあらわれることになる。造形化は想像界の存在を現実界の存在に反転させる重要な手段である。

されることからカステルサルドの親方といわれている画家が制作した「大天使・聖ミカエル」(二五世紀末)である。悪魔との戦いで神の軍の総帥を務めるミカエルが槍で突き刺そうとしているのが悪魔だ。緑色の皮膚は死体の腐敗色である。角、鋭い牙、猛禽類の足爪のほか、女性的な乳房と男性器を想起させる大きな鼻をもっている。人間と動物、男女のハイブリッドだ。角の形状は、羊か山羊か判断に迷うところだが、山羊であろう。なぜなら、山羊鬚や山羊角は悪魔表象の定番だからだ。山羊は繁殖力が高く、性的紊乱と結び付けられ、好色な悪魔が人間と性的な交わりをもつという信仰と関連付けられた。

また新約聖書「マタイによる福音書」二五章にあるように、神は最後の審判ですべての人びとを羊飼いが羊と山羊をわけるようにやりわけ、羊側の人びとには祝福を与えて天国行きを確認する一方、山羊側の人びとには悪魔のために用意している永遠の火のなか、すなわち地獄に墮ちるよう厳しく命じている。山羊は悪魔と地獄に結び付けられる動物なのである。

◆◆◆ メキシコの悪魔仮面 ◆◆◆
ところかわって、民博所蔵のメキシコの悪魔の仮面「ディアブロ」を見てみよう。一五二一年にアステカ王国がスペインによって征服され、宣教師によるキリスト教の布教が始まった。その過程で現地に元からあった仮面に角が付けられ悪魔化されたのである。山羊の角かは定かではないが、人面と動物の角のハイブリッドであることは確かだ。

の転覆であった。当時、魔女や悪魔の悪辣な行為を論じた悪魔学書が多数出版されたが、そこには悪魔や魔女の活動を描いた画像が挿入されているケースがある。バルナバ会修道士フランチェスコ・マリア・グアッツォが著した『魔女要論』(一六〇八年)には、山羊顔で、蝙蝠の羽が生えた人間の身体をもつ悪魔が魔女たちから尻への接吻を受けている版画が掲載されている。



フランチェスコ・マリア・グアッツォ著『魔女要論』
(1608年)より

想像界の生物相 ハイブリッドな悪魔

大成学院大学教授 黒川 正剛
くろかわ まさたけ



資料名 | 悪魔仮面「ディアブロ」
標本番号 | H0131791
地域 | メキシコ
サイズ | 高さ 50cm × 幅 25cm × 厚さ 17cm

新世紀ミュージアム

浜松市楽器博物館は、日本では唯一の公立の楽器博物館として生きた音楽を紹介し、次世代を育成する活動を展開している。「音楽のまち」を名乗る浜松市の音楽文化をささえる貴重な施設である。



日本の楽器コーナーに展示された雅楽の楽器。壁に舞楽の様子を映したモニターが見える(2017年8月)

いる。正面の階段で地階に降りていくと、順番にオセアニア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパの楽器のコーナーが並んでいる。

展示されている楽器群は、多くの人手にとってはあまりなじみがないかもしれない。しかし、展示の所要所にヘッドフォンやモニターが設置され、それらがどのように、どんな音楽を奏でるのかがわかるようになっていく。また一日に何回か、展示されている楽器について職員によるギャラリートークがあり、毎週日曜日には展示室のガイドツアーもおこなわれ、世界の音楽に対して市民が理解を深めるための工夫を随所に見ることが出来る。

この博物館では、ヨーロッパの楽器コレクションにたどりつく前に、世界のさまざまな楽器を見るよう展示コーナーが配置されている。そこには、西洋の音楽も世界の多様な音楽のひとつとして位置付けて理解しようとするこの博物館の明確な意志を読みとること

世界の楽器を知る

博物館に入り左手を見ると、アジアの楽器コーナーに展示されたインドネシアのガムランなどが目に飛び込んでくる。右手には雅楽の楽器をはじめとする日本の楽器のコーナーがおかれてを丹念に探し出し、彼らの協力により資料の保存管理や展示に加えて、レクチャーコンサート、ワークショップなどを開催してきた。一九九五年に開設してから二〇年余りのあいだに形成された人材のネットワークは、楽器コレクションと結び付き、この博物館を生きた音楽文化を発信する場としている。浜松市楽器博物館が制作しているCDシリーズにも、その成果を見ることが出来る。二〇〇四年以降、所蔵楽器等を使ったCDが継続的に制作され、シリーズは五五枚に達している。他で

は耳にすることのできない貴重な録音が多く、なかには文化庁芸術祭レコード部門大賞を受賞したCDも含まれている。

次代の音楽文化のために

浜松市楽器博物館は、二〇〇〇年から、移動博物館と称して、市内の小学校への訪問授業を続けている。楽器を体験することや、映像や写真、絵、音などを用いてその楽器を奏でる人びとについて知るプログラムを提供している。博物館から遠い地域に重点をおき、

生きた音楽文化の場

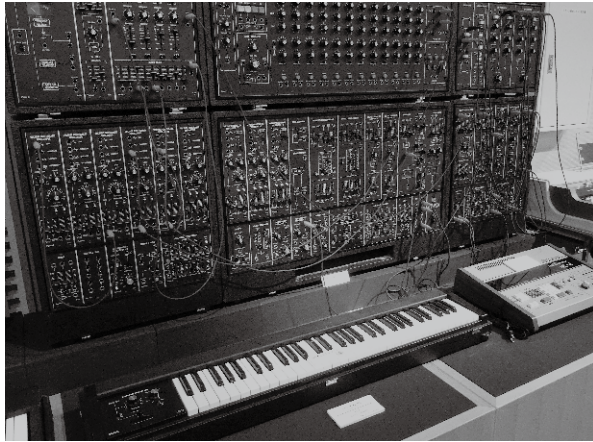
日本には世界のさまざまな音楽を演奏する音楽家がいる。海外から日本にやってきた演奏家もいれば、日本から出かけていつてある音楽を学んで帰ってきた演奏家もいる。西洋楽器にしても、現代の楽器ばかりでなく、歴史的な楽器を専門とする演奏家もいる。また、所蔵資料を楽器として維持するためには、楽器の調律や調整をおこなう知識と技術をもつ者の存在も必要だし、展示をおこなうためには、研究者の協力も必要とされる。

浜松市楽器博物館は、こうした人材職員二人が一組となつて、少ない年で五〜六校、多い年では一〇〜一二校をまわっている。

予算削減の波にさらされる公立博物館で、重要ではあるが地味な活動を続けていくのは簡単ではない。しかし、工夫をこらしてこうした事業を続ける背景には、次代の音楽文化をなう子どもたちを育てたいという理想がある。

浜松市は、ヤマハ、河合楽器製作所、ローランドといった世界に名だたる洋楽器メーカーの本拠であり、浜松国際ピアノコンクールを始めとするコンクールや演奏会、次世代の音楽家育成のための活動、また市民の音楽活動も盛んである。二〇一四年には、ユネスコの創造都市ネットワークに、音楽部門ではアジアで初めて加盟が認められた。

しかし、その「音楽」は、西洋で育まれてきた芸術音楽の系譜を引くものに限定される傾向がある。西洋芸術音楽を日本社会が積極的に受容して自分ものとしてきた歴史には大きな意味がある。しかし、その文化的意義を見出すためには、日本の音楽や世界の他の地域の音楽も知る必要がある。浜松市楽器博物館の努力は、日本において、音楽文化をさらに発展させるひとつの方向性を示しているといえるだろう。



上：電子楽器の展示コーナーから(2017年8月)
下：移動博物館でモンゴルの馬頭琴を体験する生徒(浜松市楽器博物館提供)



浜松市楽器博物館。浜松駅から約10分の場所に位置する(2017年8月)

手芸で社会とつながる ——大阪万博の「童心曼陀羅」

山崎 明子 奈良女子大学准教授

従来家庭的、趣味的なものとしてされてきた刺繍だが、万国博覧会という国際的なイベントで披露され、女性たちに活動の場を広げるきっかけを与えた。約五〇年前に世界に向けて発表された刺繍に手芸のもつ力を見る。

大阪万博に見る手芸

一九七〇（昭和四五）年に大阪千里で開催された日本万国博覧会（以下、大阪万博）は、アメリカ館の「月の石」に代表されるように、当時の最先端の科学技術の展示によって、「人類」の未来を描き出す一大スベクタクルであった。その一方で、さまざまな民族文化や伝統的手工芸品も展示された。アメリカ館でのアンティークキルトをはじめ、各国のパビリオンでは手工芸品の展示やその制作実演がおこなわれた。こうした展示物の一部は現在国立民族学博物館や大阪日本民藝館の収蔵品となっている。先端科学と伝統文化は、この文化の祭典においてふたつの大きな特徴であったといえる。

現在残されている大阪万博の記録のなかではあまり注目されていないが、大阪

万博では日本女性による共同制作の巨大な刺繍作品がひとつのパビリオンに展示された。それが住友童話館（住友グループ）の「童心曼陀羅」である。素朴な動植物が一面に刺されたこの作品は、日本有数の刺繍グループである戸塚刺しゅう協会の女性たちが共同制作したものであった。戦後の手芸活動のなかでも筆者が知る限り最大規模の共同制作品であり、また手芸作品が公的空間を飾った稀な例である。「童心曼陀羅」とはどのようなものだったのだろうか。

「童心曼陀羅」

住友童話館は球体のカプセルのようなパビリオンで、東西の名作童話約五〇作品の名場面の立体上映や、市川崑監督による



住友童話館の「童心曼陀羅」(写真提供：大阪府)

戸塚刺しゅうと万博

戸塚刺しゅう協会は一九五二（昭和二七）年、その前身となる西宮市の「刺繍研究所」に始まる。創設者戸塚きくは、一八九八（明治三一）年山口県阿武郡椿郷西分村（現在の萩市椿）に生まれ、阿武郡立実科高等女学校を卒業後、一九二六（大正一五）年、入院先の病院でフランス刺繍に出会った。退院後、上京して日本にフランス刺繍をもたらし村山岩の内弟子となり、多くの作品を制作した。一九五六（昭和三一）年、初の教則本『フランス刺繍と図案第一集』を監修し、刺繍普及のため全国各地をめぐる、大阪万博後も、海外で刺繍展を開催した。後に戸塚刺しゅう協会は、国内六一の支部のみならず、台北やバンコクなどにも支部を置いて現在も広く活動を続けている。

戸塚きくは女性たちの趣味の集いとして協会を運営してきたとされるが、万博を契機に広く社会的なかわりや公的な結びつきをもつようになった。住友童話館に戸塚刺しゅう協会を参加させるように促したのは小谷であり、広



住友童話館外観(写真提供：大阪府)

『つる』『パンパの活躍』を上演するパピブツペ劇場などで童話の魅力を伝えるものだった。住友関連企業四六社による共同出展で、そのプロデューサーとして選ばれたのは元・電通社員の小谷正一であった。万博という空間で小谷が選んだのは「童話」の世界であった。小谷は、社会を進歩させた原動力は夢であり、人の夢が童話を生み、童話が人間社会を進歩させてきたと述べ、「子供に希望を、おとなに童心を」をモットーに、住友童話館に多様な童話世界を繰り広げた。

この展示の最後を飾ったのが「童心曼陀羅」である。子どもたちによる共同制作絵画を下図とし、戸塚刺しゅう協会の全国一人の女性会員が刺繍し、ドーム内の壁面を飾った。動物や花の下図を描いたのは神戸市立東灘小学校の児童で、絵と構成の指導は当時まだ無名の小学校教師だった灰谷健次郎だった。灰谷は万博の翌年小学校を退職し、一九七四（昭和四九）年に『兎の眼』で文壇デビューすることとなる。小谷が絵の指導を灰谷に、その刺繍を戸塚刺しゅう協会に依頼したことで「童心曼陀羅」は完成した。戸塚刺しゅう独特のメルヘンな西洋刺繍と小学生の絵がうまく結びつき、この作品の世界観が作り上げられた。

告業界で著名な瀬戸保太郎（小谷の友人の長女・瀬戸貞子とその妹（戸塚刺しゅう協会会員）は、戸塚刺しゅう協会を公的な文化団体に認知させようと、きくを説得したとされる。

大阪万博は戸塚刺しゅう協会にとって大きな転機となった。個人的でドメスティックな趣味と考えられてきた手芸が、万博というイベントを通じて女性たちに社会参画の道を拓いたともいえるだろう。



新版『国立民族学博物館 展示案内』刊行!

開館 40 周年をむかえ、本館展示の全面改修が完了したことを記念して新しい展示案内書が刊行されました。従来の展示場ごとの解説に加えてあらたに、みんぱく全体をテーマで読みとくエッセーも収録。地域文化を横断する、みんぱく回遊ガイドです。

《地域展示・通文化展示》

「地域展示」では展示場の地域区分ごと、「通文化展示」では人類共通の文化である音楽や言語について、各 10 ページで展示や資料の魅力を紹介しします。



《テーマで読みとく》

みんぱく全体を衣・食・住・生業・娯楽・人生儀礼・宗教といったテーマで読みとくエッセー 14 本を収録しました。エッセーを読んでから展示場を回遊すると、人間の営みの似ているところ、違うところが見えてきます。

◆テーマの一覧

- 衣** ・線からうまれる造形物
・衣装から読み取る「力」の存在
- 食** ・主食一人を生かすもの
・酒—自然の摂理が作る人類文化
- 住** ・運べる家、動く家
・建てる・住まう・思考する
- 生業** ・生きるための移動
・動物をしとめる漁具と狩猟具
- 娯楽** ・ボードゲームの広がり
・人はなぜ踊るのか
- 人生儀礼** ・すこやかな成長への願い
・世界の結婚—祝福のかたち
- 宗教** ・あの世とこの世
・世界各地のイスラーム



国立民族学博物館 展示案内

定価 1,944 円 (税込)

国立民族学博物館友会の会員価格 1,750 円 (税込)

編集・発行 国立民族学博物館
(B5 判/全 232 ページ/オールカラー)

お問い合わせ先

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112 FAX:06-6878-8421
e-mail contact@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ [World Wide Bazaar]
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>

編集後記

1977年11月15日、国立民族学博物館の開館記念式典がおこなわれた。一般公開は、11月17日である。今からちょうど40年前のことだ。本11月号は、開館の40周年の記念特集として、各界で活躍する方々がみんなぱくへのメッセージをご寄稿くださった。みんなぱくの魅力をそれぞれの見方で提示されており、最初の読者として編集段階から楽しく読ませていただいた。また、わたしのおすすめ欄にある今では展示場がないものや、使わないキャプションを目にして、さまざまな変化に思いを馳せた。研究の進捗や時代や社会の変化にあわせて展示は今後も変わり続けるであろう。しかし展示されたものをたしかに見たという衝撃は、寄稿してくださった方々の言葉からもわかるように、来館者の記憶に残る。小生が多少なりともかかわってきた展示がそうしたもののつ力を十分にいかしているだろうか、あらためて身の引き締まる思いがした。(丹羽典生)

●表紙：国立民族学博物館正面（撮影 大道雪代）

次号の予告

特集

「革命の残影」(仮)

みんなぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

月刊みんなぱく 2017年11月号

第41巻第11号通巻第482号 2017年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぽく

MINPAKU

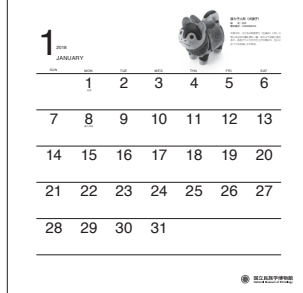
2018年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

みんなぽく わん!だふる

来年の干支・戌にちなみ、みんなぽくに収蔵されているイヌ科の動物が続き登場。イヌはもちろん、オオカミやキツネ、タヌキもまじえ、ユニークな「イヌ」を紹介しています。一年中さまざまな表情が楽しめるカレンダーに仕上がりました。あなたのお気に入りのイヌがきっと見つかるはずです！

お問い合わせ先

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112 FAX:06-6878-8421
e-mail contact@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>



定価 1,620 円

国立民族学博物館友の会会員価格
1,458 円

サイズ 29.5cm×29.5cm
(開くとタテ 59cm×ヨコ 29.5cm)

オールカラー 28 頁中綴じ

- ◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊 1,296 円です
- ◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です

※価格は全て税込です